



## 患者さんの笑顔を取り戻す 理学療法士というお仕事。

施術台から起き上がるようにする学生と、それを介助する先生。ここは福岡県大牟田市にある帝京大学福岡医療技術学部の理学療法学科実習室です。理学療法士とはリハビリテーションの専門家。スポーツ中の怪我や交通事故、脳卒中などで身体に障害が起きた際に、医師の指示のもと回復のための治療を行う、特別な人材を育てています。この授業は、人が寝て起きて歩くという、一連の基本動作能力の回復にテーマを絞ったもの。脳血管障害で身体の片側に麻痺が残った患者さんを想定し、起き上がり介助の練習を行います。指導する畑中秀行先生は、「患者さんに残された身体機能を見極めて、無駄な力を使わず意思通りに身体を動かす方法を習得していただくことが大切です。障害を抱え気持ちは落ち込んでいる患者さんが、動作を一つひとつ習得することで笑顔を取り戻していく様子を見ると、この仕事を選んでよかったと実感します。一人の治療者として学生たちに一番伝えたい部分ですね」と語ってくれました。一学年で90人程度と小規模な学科なので、先生と一对一での指導など、密なコミュニケーションができるのも特徴。また、2年生で2週間、3・4年生で8週

間ずつの計18週間という、長期の病院実習があるところも注目です。高校時代に陸上部で追求した、いかに自分の身体をスムーズに走らせるか、という興味が、理学療法学科を選んだきっかけという学生の中村知可子さんは、病院実習の経験をこう話します。「脳血管障害の方の治療現場に立ち会わせてもらった経験は大きかったです。患者さんご自身の身体を動かしたいという強い気持ちと、それなのに身体が動いてくれないというもどかしさを共有し、「心から力になりたいと思いました」。患者さんの中には、ご自身の障害を受け入れられず、抑うつ状態になる方も多く聞きます。そんなとき、客観的に一歩引いた視点から状況を観察・分析し、適切な介助法で愛情を持って支えてくれる理学療法士の存在は本当に心強いもの。1・2年生の身体を借りて3・4年生が実技練習をするなど、同じ目標を持った学生同士のつながりのなかで勉強するうちに、患者さんと心の通いあう接し方が自然と身についてくるという側面もあるそうです。根底にあるのは、誰かのために行動するという思いやりの精神。理学療法士にとって、患者さんからの「ありがとう」の一言がなにより喜びなのです。